
ボクな君と俺な自分

K_Sayuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクな君と俺な自分

【Nコード】

N6151Y

【作者名】

K | Sayuto

【あらすじ】

中学二年の6月に来た転入生はボクツ娘でロリ要素満載でおつちよこちよいな女の子。

そんな君と俺の運命的な出会いでもなんでもない出会いから始まる不思議な事も起こる日常物語。

更新は不定期、下手で初心者ですがお許しください。

プロローグ（前書き）

特に目標も無く勢いだけで思いついた小説ですがこれは全力で書きます。え、何故かって？そりゃ、俺はロリでボクッ娘が大好きだからですwwww

ブローグ

「ぼつ、ボクは十六夜^{いざよひ} 夕姫^{ゆひめ}です。こつ、これから二年間、よつ、よろしく願いします」

黒板の前にセーラー服を着た女の子が先生の横で恥ずかしそうに自己紹介をしている。

「えーつと、十六夜の席は。おつ、慎二^{しんじ}の横が空いているな。よし、あそこに座りなさい」

「はっ、はいっ!!」

そして、女の子は右手と右足を同時に前にだしバランスを崩して盛大に転んだ。頭をぶつけたらしく頭をさすりながら俺の横まで歩いて来て席に座る。

それは運命的な出会いでもなんでもなく、ただただ平凡な出会いだった。

ブローグ（後書き）

平成23年11月18日 投稿・改稿

登場人物（前書き）

まだこれから先も登場人物は追加して行く予定です。

登場人物

さかがみ
坂上 慎二

男 13歳 1996年 10月10日生まれ

本作の主人公。特にこれと言った特徴もない平凡な中学生。強いて言うなら、硬式テニス部に所属しており、強さは現3年生にも劣らない。両親は既に他界していて一人で一軒家という贅沢な暮らしをしている。

いづみ
十六夜 夕姫

女 14歳 1996年 5月18日生まれ

本作のヒロイン。ロリでボクッ娘でおちょこちよいいな女の子。中学生にしては身長は低すぎる方で、まない（ry

成績は相当いい方で腰までかかるサラサラな黒髪が特徴的。

かとう
加藤 優作

男 13歳 1996年 12月1日生まれ

慎二の親友。髪を茶色に染めていて不良そのものだが実は優しい奴。成績は見た目通り馬鹿だが勉強以外なら頭はいい。

慎二と同じテニス部に所属しているが監督に嫌われているため試合に出してもらった事がない。

みずこし
水越 美幸

女 13歳 1996年 7月4日生まれ

慎二の幼馴染。成績は平均。

慎二の事をいつも思っているが中々告白できずにいる。部活は新聞部でカメラと手帳はいつも持ち歩いているが写真の7割は慎二が必ず写っている。

白井しろい 香奈恵かなえ

女 15歳 1995年 4月25日生まれ

慎二が通っている学校の生徒会長。成績は常にトップでさらに容姿端麗なので告白された回数はゆうに20回を越す。何故か妙に慎二に突っかかる。

佐藤さとう 楓かえで

男 13歳 1996年 11月7日生まれ

慎二の友達。成績はいい方。"わしゃ"や"くじゃ"などの口調で話す。

剣道部で全国大会の常連。

登場人物（後書き）

平成23年 11月18日 投稿

泣く君と約束する自分

「ねえねえ、夕姫ちゃんのタイプってどんな人？」

「夕姫ちゃんってどこから来たの？」

「何人家族なの？」

「彼氏とかいるの？」

転入生恒例の質問攻めだ、多分何処の学校でもある事なんだろう。そう思いつつ、十六夜の俯いてる顔を隣の席から覗いて見る。すると、十六夜の目はうるんでいる事に気がついた、そして目には雫が溜まっているのが見えた。

（嘘だろ、質問攻めされただけで泣くなんて）

恐らく重度の人見知りなのだろう、しょうがないから俺は助けてやる事にした。

「あ、先生だ！」

その一言で、皆がそれぞれの席に飛びつく。その時を利用し俺は優作に紙切れを投げつけ夕姫の手を取り屋上に駆け込む。紙切れには「夕姫は気分が悪くなったので保健室に連れて行ったって誤魔化しといてくれ」と書いてあるので大丈夫だろう。

夕姫をフェンスのそばに立たせ、ハンカチを渡す。

「ほら、涙拭けよ」

十六夜はゆつくりと受け取り目に溜まった雫を拭き取る。

「あ、ありがとう・・・ございます」

「タメでいいよ。えーっと、あいつらは別にお前を困らせようと思つてたわけじゃないさ、ただ、転入生だからつてので興味持ってるんだよ」

「わ、わかってます。でも、怖いんです」

そう言う十六夜の肩が震えている事に気がついた。

（どーっすっかな、今は逃げれたけど戻ったらまた質問攻めだらうしな）

俺は考えを巡らせたがいい解決方法が見当たらなかったのだから見える山の事を話す事にした。

「なあ、あの山知ってるか？」

「え？えつと、ごめんなさい、わかんないです」

急に振られて驚いたようだった。

「あの山は子牙山^{しが}って言うんだけど、前に友達と行った事があるんだけどそいつがちよつと寝てる時に少し離れた木のそばに隠れたんだ。それで少したったらそいつが起きるんだけど周りに誰もいないって分かると大号泣したんだよ、可哀想になつたからすぐに出て

行ったら今度はすごい怒って殴られまくったよ、あれは痛かった」

「クス・・・」

「お、笑ったな」

俺がそう言うと、急に頭を下げ。

「ご、ごめんなさい」

「な、なんで謝るんだ？俺はお前に笑って欲しいから話したんだけど」

「ごめんなさい、前の学校で笑ったりしたら怒られて。それで叩かれて・・・」

「それって、イジメじゃないか。先生とかには言ったのか？」

「うん、言っただけだけど証拠がないからって無視されちゃった」

「なっ!？」

証拠がないからっておかしいだろ、本人が虐められてるって言うてるのに。

「だから、ボク、他人と関わるのが怖くって」

「だから・・・泣いていたのか？」

十六夜は無言で頷く。

「だから、ボク一人ぼっちのまま今まで過ごして来たんだ。今まで、そしてこれからも一人ぼっちなんだボクは……」

「そんな事ない、現に俺は今お前と居る。この学校にだっていい奴は沢山居る。もし、いじめられるような事があつたら俺が守つてやる」

こんな事を女の子に言うのは自分でもキザだと分かっていたでもそれが俺の本音だった。

「だから俺とお前は今日から友達だっ!!」

「……っ!!」

その言葉を聞いた瞬間に十六夜の目には大粒の雫が幾つも溜まり、流れて行った。

「ひつぐ、ありがとう。ボク、えつぐ、友達って、言われたの、初めてだ」

俺はそんな十六夜に「一緒に友100人作ろうな」と言っ

た。

「うんっ、ボクは十六夜　夕姫、呼び方は何でもいいよ」

「わかった十六夜、俺は坂上　慎二、俺も何でもいいや」

泣く君と約束する自分（後書き）

平成23年 11月19日 投稿・改稿

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6151y/>

ボクな君と俺な自分

2011年11月19日16時29分発行